

特集：おのまとへ

音と意味の間に

野間秀樹
(のま・ひであき)

はじめに——音象徴と差異

〈言語音〉と〈意味〉の関わりを考える視点の、ささやか
なインデックスたること、これを本稿の役目としよう。〈言
語音〉と〈意味〉の間にはあまりにも広大な沃野が広がって
いる。

手掛かりとして、まず〈音象徴〉あるいは、〈音声象徴〉
と呼ばれる現象から見よう。“sound symbolism”と言われ
るものである。“phonosymbolism”などという術語も聞か
れるようになった。日本語で簡単な例を見る。

karakara	kirikiri	kurukuru	korokoro
からから	きりきり	くるくる	ころころ
garagara	girigiri	guruguru	gorogoro
がらがら	ぎりぎり	ぐるぐる	ごろごろ

これらの単語は、それぞれ母音と子音を取り替えること
——音の〈交替〉——によって作られている。それぞれ母音
や子音が交替することによって、単語の意味が異なってくる
ことがわかる。きれいな体系をなしているが、五つ存在する
母音のうち、“e”がこうしたシステムにはあまり用いられ
ないことも察せられる。体系のこうした歪みには当然、言語
史的な理由がありうるわけである。ここでこうした仮説を立
てうるかもしれない。言語はもともとこうした均整の取れた
システムだったのではないか？ 長い歴史の中でそれが今日
のように歪みに歪んだ形になっているのではないか？ いや
いや、そこまで早まらずともいい。沃野は広大である。

さて、これらの単語はどれも何となく「回る」「巻く」「転
がる」とでもいうほどの感じであるうが、それぞれ微妙に違
う。“karakara”（からから）より“garagara”（がらがら）
のほうが例えば「重そうだ」といった感じを、音の交替が
支えている。このように音が意味を象徴するがごとくに担っ

ているシステムを〈音象徴〉という。

絶対に間違えていけないが、*ka* (蚊)、*ga* (蛾)などもそうだからといって、日本語にあつて、*k* はいつも「軽い」わけでも、*g* がいつも「重い」わけでもない。「*kaki*」(柿)、「*kagi*」(鍵)。言語外現実では柿より「軽い」鍵もあれば、「重い」鍵もある。「からから」と「がらがら」のように、それぞれ単語を対照させて、つまりどこまでも音の組み合わせである単語を〈対立〉の中で見るときに、「*k*」や「*g*」という単音の違いが際立つ。この対立における違いが音象徴を支えるわけである。二〇世紀言語学の祖、ド・ソシュール(一八五七—一九一三)の言を思い出そう——言語には〈差異〉しかない(注一)。そう、これが鍵である。

言語音とは何か

何の前提もなしに言語音と言ったが、では言語音とは何か? 〈意味を実現しうる音〉だと言ってよい。意味と違って、朝のチャイムは授業の始まりを意味するといった類の意味ではなく、どこまでもことばと結びついた意味である。意味を実現し得ないような音は、いかに人の口から発せられようとも、言語音とは認識されない。口や鼻から産出される音に限っても、あくびや、舌うち、歯ぎしり、呼吸音など、人は様々な音を発することができるが、そうして発せられる音のうち、唯一、〈意味を実現しうるかどうか〉という点に、

〈言語音か否か〉を境界づける条件が存在する。また、人工的に合成され、機械から発せられる音であっても、それが聞き手にとって言語的な意味を結びうる場合には、言語音として認識されていることになる。

意味を実現しうる音

ここで重要なのは、「意味を持っている音」だとか、「意味を実現する音」ではなく、「意味を実現しうる音」とした点である。人がことばを発するとき、ある人にとってはそのことばが意味を取り結び、他の人にとっては意味を結ばないということが、いくらでもある。日本語の母語話者と、日本語を勉強している非母語話者の二人に向かつて、同時に日本語で語りかける場面を考えてみればよい。そんな場面は「ニチジョーサハンジ」である——と言った瞬間に、日本語母語話者はうなずき——うん、「日常茶飯事だ」——非母語話者はきよとんとするかもしれない。ことばは意味として実現するとは限らない。ことばは意味として実現したりしなかったりする。同じ音に〈しつくり〉来たり、〈きよとん〉としたりする。言語にとつては、こうした状態がむしろ default (初期状態) である。もっと単純化して言うと、「通じる」こともあるし、「通じない」こともある、それがことばの本質的なありようである。同じ音が同じ意味を実現するとは限らないのである。もちろん異なった言語間では当然であるし、同

じ言語の話し手の間でさえ、同様のことが起こりうる——私はそういう意味で、言ったんじゃないよ。——しっくりorきよとん？

ことばは意味を實現したりしなかったりする

言語学の書物だけでなく、言語哲学の多くの書物は、言語が「意味を伝える」ものであるといった点から出発する。あるいはことばは「意味を持っている」という考え方から出発する。これは大変不思議なことである。言語学者や哲学者のほとんどは〈ことばはなぜ通じるのか〉と問いを立ててきた。言語にとつての事実から照らすとき、そうした問いの立て方は、いかにも不十分である。その問いが、ことばが通じたり通じなかったりするありようの、「通じる」という側面だけ、つまり事実の半分しか問うていないからではなく、〈通じたり、通じなかったりする〉のが本質的なありようであるのに、その本質を問うていないからである。

言語場と言語の存在様式

〈ことばは意味となる〉

人が、あることばを発する。そうした営みは、必ず、ある〈場〉において行なわれる。言語が行なわれるそうした場を〈言語場〉(注2)という。ことばが實現するのは、すべから

く言語場においてである。言語場において、ことばは意味として實現することもあるし、實現しないこともある。つまり〈ことばは意味を持たない。それは意味となる〉(注3)。

〈ことばが意味となる〉ものであると見るということは、意味は聞き手において實現するものであるということに他ならない。もちろん話し手自身も自らの声を聞く、聞き手のうちの一人である。二人以上が語り合う対話の言語場にあつては、話し手が語る言語場と、聞き手がそれを聞く言語場という、時間的にも空間的にもわずかにずれた二つの言語場が、一つの言語場として統一されている。話し手の言語場と聞き手の言語場は時間的に異なるのであるが、普通はそれがあまりに微細な違いなのでわからない。この違いは例えば擬似的にせよ、録画といったテクノロジーによって、話し手の言語場と聞き手の言語場を二つの言語場へと裂き、時間的、空間的な差を拡大することによって際立たせることもできる。〈いま・ここ〉で行なわれる言語でさえ、話し手と聞き手の言語場は異なっている。このことは〈意味〉の實現が話し手と聞き手の間でさえ、異なりうることを支える、物理的な条件でもある。

言語場において言語が行なわれるありようを見ると、文字を有する言語は、〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉という二つの實現形態を持つことがわかる。これは〈文体〉としての〈話しことば〉や〈書きことば〉といった区別ではなく、言語の物理的な存在様式、實現形態の区別である。

〈話されたことば〉は音声、つまり言語音によって実現される。〈書かれたことば〉は文字によって実現される。音と意味を考えるにあたっては、こうした違いを押さえておくことも不可欠である(注4)。

ことばの反復使用を可能にすることばの可変性

話し手と聞き手という二人の参加者は、異なった個人史を有する異なった主体であるので、当然のことながら、同じ〈ことば〉でも、実現しうる意味は異なりうる、と言うより、〈原理的に異なりうるものとして意味は実現する〉と言ってよい。ことばが反復可能な秘密はここにある。同じ音の形、同じことばを異なった人々の間で反復することが可能な原理が、ここに隠されている(注5)。ことばは一定不変の意味を持っていてから、繰り返し用いることが可能なのではなく、〈ことばはいつも可変性へと開かれている〉がゆえに、異なった人々、異なった場で、繰り返し用いることができるのである。そしてこの仕組みは同時に、常に新たな言語場が生成するに従って、ことばの実現する意味が、時の流れと共に変化してゆくことを、原理的に保障するものとなる。

個と言語共同体

同じような言語生活空間を共有し、同じような生活史を有

する共同体であれば、ある一つの単語なり表現なりは、つまり特定の音の形は、多かれ少なかれ、同じような意味として実現するであろう。そうした共同体を〈言語共同体〉と表現することができよう。小さな家族、サークルのような共同体から、方言や日本語の共同体といった大きな共同体まで、性格は様々であれ、多様な共同体が複合的、重層的に存在している。〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の共同体も異なっている。かくして〈特定の言語音が言語共同体の中で同じような意味を実現する〉というありようが、重層的な言語共同体の中に形成されてゆくわけである。個と集団はこのように複合的に連なっている。

言語音の多様性と音韻体系

そもそも言語音は、言語ごとに多様である。方言間や社会階層間でさえ異なりうる。ちなみに、ある言語音を例えば母音/a/なら、それを/a/と認識するかどうかさえ、その聞き手がいかなる言語の話し手かということに規定される。朝鮮語ソウル方言の八つの母音の中には唇を円く尖らせる母音/u/と、「イ」のような唇の形で「ウ」と発音する母音/ɯ/がある。表音文字であるハングルでは、円唇母音の前者/u/は「ㄱ」という字母で表され、平唇母音の後者/ɯ/は「ㄷ」という字母で表される。日本語東京方言の話者はこのいずれも「ウ」として聞く。朝鮮語ソウル方言の母語話者にとっては全く異なる

った母音なのに、である(注6)。英語の“video”の/v/は、日本語母語話者は「ビデオ」と/b/で聞き、またそう発音しがちであるし、朝鮮語母語話者は「ビディオ」と/p/で発音したりする。このように、母音、子音などからなる音の組織、音韻体系も言語ごとに異なるわけである。

オノマトペと言語の恣意性

ここで引用を許されたい。以前こう書いた(注7)。

オノマトペのうち擬声語については、言語の違いをある程度超えた共通するところがあることが予想される。言語外現実の音が同じであれば、音そのものは概ね同じように聞こえるだろうからである。

犬が日本語で「ワンワン」と鳴いている時に、中国語では狗gǒu(コウ)が汪汪wāngwāng(ワンワン)、モンゴル語ではhoxoi(ノホエ)がhan han(カンガン)、トルコ語ではköpek(キョペックキ)がhav hav(ハウハウ)と鳴く。そうかと思うと英語ではdogがbow-wow(バウワウ)、ドイツ語ではHund(フント)がwauwau(ヴァウヴァウ)、フランス語ではchien(シヤン)がouah ouah(ワワ)、スペイン語ではperro(ペロ)がguau-guau(グアウグアウ)、イタリア語ではcane(カーネ)がbau bau(バウバウ)、ロシア語ではcobaka(サバーカ)がrab rab(ガフガフ)、チェコ語ではpes

(ペス)がhaf haf(ハフハフ)と鳴く。朝鮮語ではkai(ケー)がgomgom(モンモン)と鳴いているし、国際人工語たるエスペラントでもhundo(フント)はちゃんとboj-boj(ボイボイ)と鳴いている。

日本語であれば(エイヌ)と名づけている、似たような言語外現実の対象を、言語が異なると、じつに多様な音で名づけていることがわかる。これは言語ごとにちよつと「なまってる」などという違いではない。こうした事実を鑑みて、ソシユールは言語記号の〈恣意性〉という観点を強調した。言語が名指す対象と、言語音との間には恣意的な関わりしか認められないのである。その(エイヌ)という生き物が発する声のほうを見ると、(エイヌ)そのものの名づけに比べれば、どこまでも相対的にはであるが、はるかによく似ている——誰しもが直観的にそう感ずるであろう。もともと発する声にそれほどの違いなどなからうから、似ていて当然、それぞれの言語の違いほどに「なまってる」いるだけだと、そう言ってもいいほどである。しかしソシユールは擬声語などに見えるこうした相似性も、限られたもので、言語にとつては二次的、副次的な重要性しか持たないとする(注8)。

音の集合体としてのことば

よく知られているように、詩人アルチュール・ランボオ

は、"A noir (黒) 'E blanc (白) 'I rouge (赤) 'U vert (緑) 'O bleu (青) :voyelles (母音たち)" のように、フランス語の母音(字)と、フランス語の色彩つまり意味とを詩の中で寄り添わせた。同じ言語内での音と意味の実現のありようについては、ランボオのごとく単音を取り出して意味との関わりを語る前に、そもそも〈話されたことば〉における〈単語〉とは、音声的な実現、つまり〈音〉の集合体なのだというところに、思いを致さねばならない。〈話されたことば〉においては、〈単語〉も〈文法形式〉も〈かたち〉、即ち〈音の集合体〉なのである。それは単音の組み合わせであるばかりでなく、高さや強さ、長さ、場合によっては声色といったものを常に肌身離さず随伴する〈音のかたち〉である。それも要素の単なる加算としての和であるような形ではなく、要素に解体すると全体が失われるような〈かたち〉——ゲシュタルト (Gestalt) ——である。高さや強さ、長さのない単語など、そもそも原理的に実現し得ない。こうした意味で、言語音はランボオ以前の存在である。

意味の区別への関与性と非関与性

解体し得ない〈かたち〉を前に、詩人は色彩を寄り添わせ、言語学の光は要素を照らし出そうと試みる。言語学は、当該の言語共同体の話し手において、言語音を構成する様々な性質のうち、いかなる性質が〈意味の異なりをもちたらず

素たりうるか〉ということに着目し、これに肉迫した(注6)。またしても差異への注目である。

日本語東京方言では、どの音節が高いか、低いかといったことは、場合によっては、異なった意味を実現する、決定的な要素となる。はし「高低低」が(箸が)、はし「低高低」が(橋が)、はしが(端が)。こうした場合に、音の高さは意味の区別に〈関与的である〉と言語学では言っている。正確には、どの音節から音が下るかが意味の区別に〈関与的〉であると言い、この下がり目を〈アクセント核〉などと呼ぶ。

朝鮮語ソウル方言では、単語におけるこうした音の高低は、意味の区別に関わらない。朝鮮語ソウル方言にあつては、音の高低は単語の意味の区別に〈非関与的である〉。ちなみに同じ朝鮮語でも、釜山や大邱など東南方言では、音の高低は単語の意味の区別に関与的である。十五世紀朝鮮語でも音の高低が関与的であった。英語では、「名前動後」などと言われるように、前の音節にアクセントがある"input"は名詞「輸入」、後ろにある"input"は動詞「輸入する」となる。音の高低ではなくて、音の強弱が単語の意味の区別に関与的なのであるが、日本語や朝鮮語は非関与的である。

意味と関わる言語の〈音〉というと、母音、子音といった、区切ることのできる音、分節音だけを問題にすることが多いけれども、じつはこうした超分節的な要素も言語の〈音〉、それも欠かすことのできない音である。

色彩と言語

——広義の音象徴システムとしての言語

ランポオに倣って言えば、母音、子音といった単音が色相だとすると、音の高低や強弱などは彩度や明度というところである。〈色〉はどれもこうした性質を不可分のものとして有している。元来〈光〉それ自体に「色」はなく、どこまでも人間のうちにあって〈色〉として実現されるあたり、〈音〉と〈意味〉との関係にもよく似ている。

〈音のかたち〉といった総合的な見かたをすると、単語にせよ、文法形式にせよ、それぞれの音の形が意味を実現するのであるから、究極的には言語音全体が意味と切り離せない結びつきをなしているということになる。音の〈ゲシュタルト〉、かたちが、特定の意味を実現するのである。音と意味のこうした素朴な結びつきに限って言うと、〈話されたことば〉にあつては、言わば〈言語は広義の音象徴システム〉である。

言語外現実と言語内のシステムを区別す

26112

ところで、先のランポオの母音の象徴の例には、意味をめぐる重要な落とし穴が隠されている。例えば「Aは黒」と言うとき、〈Aという母音が黒いイメージを持つ〉などと誤解

してはいけない。詩的体験としてはいいが、言語学では許されない。「Aは黒」と言うときに成立するのは、〈Aという母音が「黒」で名指されるような対象と直接結びつけられる〉ことではなく、〈Aという母音が「黒」で名指されるような対象と、「クロ」という音の形を通して間接的に結びつけられる〉ほどの関わりでしかないという点である。「黒」もまた、言語のレベルの存在であつて、言語外現実の対象ではない。

つまり「クロ」という音の形が、ゆるやかな、ある範囲の色彩を名指しているのである。Aという母音が何かを象徴する以前に、「クロ」の方もこれ自体が、広義の音象徴システムなのである。したがって、例えば〈どの母音がどの色彩名称を想起させるか〉といった問いと、〈どの母音がどのような色を想起させるか〉といった問いは、全く別の次元の問いである。前者は言語学で扱いうるであろうが、後者は心理学ではあつても、言語学ではない。言語外現実と言語内のシステムは常に厳密に区別して扱われねばならない。言語内のシステムを論じているつもりが、いつしか言語外現実のありようを論じることに陥りかねないのである。

音と意味、音と文法

先に特定の音の形が特定の意味を実現するといった。このことは単語の語彙的な意味に限らない。語彙を超えて、文法にも特定の音のゲシュタルトが関わりを見せるのである。例

えば日本語の動詞の言い切りの形がウ段で終わるなどというのは、-uという音で終わるゲシユタルトが、動詞という語彙に文法的なカテゴリーを想起させることを支えているわけである。「食べた」「書いた」「読んだ」「遊んだ」等々から共通して想起させる時間的な距離感、隔絶感、達成感といったものも、これらに共通する音の形が支えている。これらは非常にゆるい支えだというだけであって、これはもう広い意味での音象徴システムである。ドイツ語に見られる、lang長い、langerより長い、といったウムラウトと呼ばれる母音の変容による語形変化も、音象徴と言える。「ながい」ものより「ながーい」ものがより長そうなのも、アド・ホックではあっても、素朴な音象徴である。エスペラントなどは、音と単語の形造り、そして意味との関わりをさらに高度にシステム化している。動詞の不定形は-i、現在形は-as、過去形は-is、未来形は-os、命令形は-u、名詞の非対格形は-oで終わるといった具合である。ami愛する、amis愛している、anis愛していた、amos愛するだろう、amuu愛せ、amo愛。音と意味のこの規則性は愛すべき潔癖さである。音は語彙的な意味だけでなく、文法的な機能をも支えている。

〈オノマトピア〉としての朝鮮語

オノマトピアの例から入ったので、ここで朝鮮語のオノマトピアに関わることを見ておくのもいいであろう。このことはじ

つは日本の言語学に深いところで関わっている。日本語を始め、様々な言語で音象徴は見出せるが、とりわけ朝鮮語のオノマトピアと音象徴は言語学者を唸らせるほどのものである。朝鮮語こそ、オノマトピアの場所 (topos)、擬声・擬態語が謳歌する理想郷、近年見える造語で言えば、〈オノマトピア〉(onomatopia) (注11)である。

日本語もオノマトピアが豊富な言語と言われているが、朝鮮語はさらにこれを凌ぐ。近現代の短編小説テクストを簡単に比較してみても、朝鮮語のオノマトピアよりは歴然としている。日本語では、地の文でも多用する例えば吉本ばななのような作家もいるが、多くは会話文でオノマトピアが好まれる。

これに対し朝鮮語では、会話文だけでなく、描写的な地の文、それも重厚な硬い文体でもオノマトピアが多用されるのが特徴である。全二九五文からなる李浩哲『裸像』など、うち一〇一文、三四・二%の文にオノマトピアが用いられている。崔仁勲『九月のダリア』は全八六文のうち、二五文、二九・一%、解放前の作品、金裕貞『椿の花』は全一五九文中、四二文、二六・四%といった具合である。「椿」にあやかると、日本語の名人芸というべき、里見弾の『椿』などは最も多いほうで、全九二文中、一九文、二〇・七%である。オノマトピアをいかにも目的意識的に用いたことが歴然としている森鷗外『電車の窓』でさえ、全一五二文、うち二〇文、一三・二%、全八八文からなる井伏鱒二の『鱈』など、どうゆるやかに数えても一文しかないようである(注11)。

朝鮮語の世界が日本の植民地下にあるなかで、現在のソウルにあった最高学府、京城帝国大学に小林英夫（一九〇三—一九七八）が赴任する。この若き言語学者は、後に日本語の音象徴の研究、また文体論研究へと向かうこととなる。朝鮮語の煌めくばかりの音象徴に触れた言語学者としては、故なきことではない。小林英夫は、そう、現代言語学を基礎づけることとなったソシュールの『一般言語学講義』（初版は『言語学原論』）を、世界でもいち早く他の言語に訳した学者である。同じく京城帝大教授として赴任した国語学者・時枝誠記（一九〇〇—一九六七）は、この小林英夫の『一般言語学講義』を読んでソシュール批判を展開し、かの〈言語過程説〉を築き上げたのであった。ちなみに、京城帝国大学には、朝鮮語の方言の〈音〉を涉獵した学者、小倉進平（一八八二—一九四四）がいたし、その弟子で、後に朝鮮語学、中国音韻学、文字論、一般言語学をはじめとする研究をなし、世界最大の言語学辞典たる三省堂『言語学大辞典』を編んだ巨人、河野六郎（一九二二—一九九八）の若き姿があった。「朝鮮言語芸術が到達しうる限界点」とまで言われた代表作「蕎麦の花咲く頃」^{イ・ヒョソク}で知られる、朝鮮語のオノマトペを自在にテクストに編みこんだ小説家、李孝石（一九〇七—一九四二）もまた、京城帝国大学英文科の若き学徒であった。

朝鮮語の音象徴

朝鮮語の擬声擬態語と、オノマトペにおける音象徴については、他稿に詳しく述べているので（注12）、詳細はそちらに譲ることとし、ここでは「赤い」という形容詞をとって音象徴の一端を見るに留めよう。

	語頭は濃音	① 빨갰다	語幹の母音は陽母音 ㅏ [a]
	語頭は平音	③ 빨갰다	語幹の母音は陰母音 ㅓ [ɔ]
		④ 빨갰다	
		[paɭgaɾaˈpaɭgaɾa]	
		[pɔɭgaɾaˈpaɭgaɾa]	

表の四つの単語はいずれも「赤い」という意の形容詞である。朝鮮語の母音は陽母音と陰母音に分けられるが、ハンブル字母の字形も左右対称である。陽母音からなる単語は概ね好感のもてる対象、陰母音からなる単語は好感の持てない対象について用いることが多い。他にも、明るい／暗い、小さい／大きいなど、大きな傾向を見出せる。濃音とは喉頭の激しい緊張を伴う子音、平音は緊張のない子音である。これらはかなでは書き分けられない。平音より濃音がより激しかったり、鋭かったりする対象に用いられる傾向がある。①は美

しい花や唇が赤い、②は同じ赤でもより印象の悪いものに、③は可愛い子供のほほが赤い、④は酒に酔って赤いとか、熱で顔が赤い、などといった具合に使い分ける。この例は氷山の一角に過ぎない。じつは「赤い」ことを表す単語だけでもゆうに一〇〇以上あるとも、三〇〇以上あるとも言われるほどである。

言語音と意味の関わりに思いを馳せるとき、朝鮮語の言語事実が見せてくれる音象徴システムの繊細さは、言語学的な記述への意志を挫くに十分である。煌めくばかりの膨大な単語たちが言うのである——どうだね、君はこれでもまだ音と意味を問うのかと(注13)。

〈音と意味〉から、〈音と文字と意味〉へ

これまで見てきたのは、基本的には〈話されたことば〉をめぐる問題であった。しかしながら、言語が〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉という二つの存在様式を有する以上、言語音と意味の問題は文字の問題を避けて通ることはできない。〈書かれたことば〉は〈話されたことば〉の単なる写像などではないからである。

朝鮮半島の代々の王朝の文字といえは漢字であり、文といえは漢文であった。十五世紀に王・世宗(セジョン、一三九七—一四五〇)の主導のもとに朝鮮王朝の知の粹を集めて、今日〈ハングル〉と呼ばれる文字〈正音〉が創製され、『訓民正音』と

いう書によって公にされようとしたとき、崔萬理(チエマンリ、一四〇〇—一四四五?)ら、王朝の原理主義者たる守旧派知識人たちは驚愕し、これを諫めた。朝鮮半島の永い知の歴史は漢字漢文で作られたものだったからである。これに対し正音革命派のイデオログ・鄭麟趾(チョンリンジ、一三九六—一四七八)は『訓民正音』の跋で高らかにこう宣言する。「天地自然の声有れば、則ち必ず天地自然の文有り。」この地にこの地の文あるは天地自然の理である。そして正音の意義を説き、こう言う。

「用ゐて備はざる所無く、往きて達せざる所無し。」正音で書けぬものはない、正音こそ森羅万象を我がものとする文字である。さらに言語における音と文字を考えるにあたって決定的な命題を突き付ける。「風声、鶴唳、鷄鳴、狗吠と雖も、皆得て書くべからん。」風のそよぐ音も、遠き鶴の鳴き声も、夜明けを告げる鷄鳴も、そして犬の遠吠えさえ、おおよそ正音の表わせないものはない、どうだ、かつて漢字で朝鮮語のオノマトベまで表わせたかと。

繊細にして千変万化の華麗なる〈意味〉を実現している十五世紀朝鮮語の〈音〉は、漢字漢文エクリチュールではどうして覆いつくせないものであった。〈正音エクリチュール〉を得て初めて、〈音〉は文字としての〈かたち〉を纏ったのである。そしてじつは、朝鮮語の子音字母は人の発音器官を象って作られていた。何と文字のゲシュタルトそのものにさえ、〈音〉が棲んでいたのである(注14)。

文字は中原に象形あり、地中海にアルファベットがあつ

た。〈象形〉とアルファベットはそれぞれ文字システムの極北である。そして朝鮮半島に、めくるめく音の交替を驚くべきシステムで書き表わす〈正音エクリチュール〉が誕生する(注15)。〈音と意味〉を考える営みは、こうしてユーラシアという、文字システムの沃野をも巻き込んで、〈音と文字と意味〉を考える営みへと、我々を導くのである。

注1 ド・ソシュール(一九四〇:159-160、一九七二:168-169)。

注2 河野六郎(一九七七:6-7、一九八〇:110-111、293-294)

の「言語的場」と「伝達の場面」、また野間秀樹(二〇〇八

・324-326)参照。

注3 ことばが意味と〈なる〉ものであることをはじめ、こう

した言語と意味をめぐる問題については野間秀樹(二〇〇八

・321-40)参照。

注4 〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉、また文体の区

別については、金珍娥(二〇〇六)、野間秀樹(二〇〇七:

28-38、二〇〇八:326-353)参照。

注5 ことばの反復可能性については、デリダ(二〇〇二:

22)、野間秀樹(二〇〇八:380-384)の議論を参照。

注6 朝鮮語の音声学、音韻論については、野間秀樹(二〇〇

七bcd)参照。

注7 野間秀樹(二〇〇一)。

注8 ド・ソシュール(一九四〇:94、一九七二:100)。

注9 音素をめぐる一般言語学的な問題についてはヤコブソ

ン(一九七七)、日本語と朝鮮語の音素をめぐる基本的な概

念については、野間秀樹(二〇〇七c:258-267)参照。

注10 寛寿雄・田守育啓編(一九九三)などを参照。

注11 詳しくは野間秀樹(一九九一:84-86)を参照。

注12 野間秀樹(一九九〇、一九九一)。同稿はWEBから容

易に入手できる。同稿執筆のための朝鮮語のオノマトペの調

査後、二〇年近くが経つが、興味深いことに、そこに挙げた

用例のうちには、既にソウル方言の若い世代がほとんど用い

なくなっている擬声・擬態語が散見される。

注13 それにも関わらず、こうした課題に取り組む言語学者た

ちが存在する。青山秀夫編著(一九九一)は代表的な業績で

ある。他の研究については野間秀樹(一九九〇、一九九一)

参照。

注14 十五世紀以来の〈正音エクリチュール革命〉と言うべきあ

りようについては野間秀樹(二〇〇七a:18-28)参照。ま

た姜信沆(一九九三)参照。正音の制字原理については趙義成

(二〇〇八)も参照。朝鮮語は形態音韻論的な音の変化の激

しい言語である。これを表記するハンゲルのシステムの面白

さは一度は触れるに値しよう。野間秀樹(二〇〇七d)参照。

注15 文字を考えるにあたって、河野六郎(一九九四)が欠か

せない。漢字と朝鮮漢字音の関わりを考えると、仏典の説諭

といった面白い問題も浮かび上がってくる。伊藤英人(二〇

〇四)参照。

参考文献

- 青山秀夫編著（一九九一）『朝鮮語象徴語辞典』大学書林
 伊藤英人（二〇〇四）「講經と讀經——正音と讀誦を巡つて——」『朝鮮語研究 2』朝鮮語研究会編。くろしお出版
- 寛寿雄・田守育啓編（一九九三）『オノマトピア——擬音・擬態語の楽園』勁草書房
 姜信沆（一九九三）『ハングルの成立と歴史』大修館書店
 金珍娥（二〇〇六）「日本語と韓国語の談話における文末の構造」東京外国語大学博士学位論文
 河野六郎（一九八〇）『河野六郎著作集第三卷』平凡社
 河野六郎（一九九四）『文字論』三省堂
 趙義成（二〇〇八）『訓民正音』からの接近」野間秀樹編著（二〇〇八）所収
 デリダ、ジャック（二〇〇二）『有限責任会社』高橋哲哉他訳。法政大学出版局
 ド・ソシユール（一九四〇）『言語学原論』小林英夫訳。岩波書店
 ド・ソシユール、フェルディナン（一九四〇、一九七二）『一般言語学講義』小林英夫訳。岩波書店。ド・ソシユール（一九四〇）の改版
 野間秀樹（一九九〇、一九九一）「朝鮮語のオノマトペ」『学習院大学言語共同研究所紀要』第13号、第14号、学
- 習院大学言語共同研究所。筆者のサイトで閲覧可能。
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/nomahideki/index.shtml>
- 野間秀樹（二〇〇一）「オノマトペと音象徴」『湖がパンチヤクパンチヤク輝いた——朝鮮語のオノマトペ——』『月刊言語』八月号。第三〇巻第九号。大修館書店
 野間秀樹（二〇〇七a）「試論…ことばを学ぶ根拠はどこに在るのか」野間秀樹編著（二〇〇七）所収
 野間秀樹（二〇〇七b）「音声学からの接近」野間秀樹編著（二〇〇七）所収
 野間秀樹（二〇〇七c）「音韻論からの接近」野間秀樹編著（二〇〇七）所収
 野間秀樹（二〇〇七d）「形態音韻論からの接近」野間秀樹編著（二〇〇七）所収
 野間秀樹（二〇〇八）「言語存在論試考序説ⅠⅡ」野間秀樹編著（二〇〇八）所収
 野間秀樹編著（二〇〇七）『韓国語教育論講座第一巻』くろしお出版
 野間秀樹編著（二〇〇八）『韓国語教育論講座第四巻』くろしお出版
 ヤーコブソン、ローマン（一九七七）『音と意味』の六章』花輪光訳。みすず書房

特集 「萌え」の正体

「萌え」とは何か

斎藤 環

「萌えフォビア」という感情

伊藤 剛

キャラ萌えとは何か

高田明典

音楽萌え——萌えのマトリックスと東方、初音ミク

井手口彰典

「萌えIIをかし」論

山口隆之

女の「萌え」歴史

金巻ともこ

萌えの世界はどこまで広がるか

堀田純司

デザインから読み解く萌えの世界

Shiburin

萌えの論理は児童ポルノを裁けるか

原田伸一郎

アニメ作家たちの「萌え」

海猫沢めろん

押井守、宮崎駿、庵野秀明、新海誠

「萌え」に似た何か

ヤマダトモコ

恋愛資本主義という現代

本田 透

10月臨時増刊号 文楽 一人形浄瑠璃への招待— 9/25発売予定 1785円

詳しくは171頁

國文學 一解釈と教材の研究—
平成20年10月号

平成二十年十月十日発行
編集人 大島圭一郎
発行人 佐中雅徳
印刷所 大日本印刷株式会社
発行所 株式会社 燈社
〒169-8608
東京都新宿区西早稲田三十一-1
振替口座 〇〇一四〇〇一三六二五三
電話 五三八一七二五八(編集)
五三八一七二五四(営業)
FAX 五三八一七二六〇(編集)
五三八一七二五二(営業)

編集後記
◎「意味付けられる以前の存在の手触りに触れることができるもの」。これは巻頭インタビューでオノマトベについて谷川俊太郎さんが語った言葉です。同じような意味でしよう。オノマトベをことばの原始の姿だと捉える方もいました。人類最初の「ことば」。オノマトベである、と。なるほどと思います。
◎私自身は「オノマトベ」を自分を写す鏡のように感じました。イライラ、うとうと、うきうき、カリカリ、シヤツキリ、わくわく、ドキドキ、しょぼん。オノマトベは、時に自分でも気づかない感情を見せてくれます。
◎ほかにもいくらでも捉え方はあります。オノマトベとはそんな自由な「遊び」のようなことばなのかもしれません。
◎今号で「西郷隆盛」が最終回を迎えました。これまでの西郷像、明治維新像を蔑す上田篤さん渾身の力作、完結篇です。お読みください。どうぞご感想を聞かせてください。
◎次号は「萌え」を特集します。驚ろかれる方もいらつしやるかもしれませんが、まずは読んでからご判断いただきたいと思えます。そこには文学につながる「何か」がきっと隠されていると思います。(大島)

編集協力：牧野十寸穂